

多義語の語彙ネットワークに関する研究 (1)

— 形容詞「甘い」について —

青 谷 法 子

A Study on the Lexical Network of Polysemic Words: Part I

— Japanese Adjective ‘amai’ and its Word Associations

Noriko AOTANI

Metaphorical expressions enable us to use words in creative ways. As many of those expressions are used in everyday conversation, we no longer regard them as metaphors. The core meaning of words is extended through metaphor, creating polysemy. The meaning of adjectives varies, depending on the nouns with which they occur. For example, Japanese ‘amai’ is a polysemic adjective that has synaesthetic meanings such as ‘amai kaori’ (sweet smell), and other metaphorical extensions of the meaning such as ‘amai kotoba’ (sugary word) and ‘amai kangae’ (optimistic idea). How do we deal with those different kinds of nouns that cooccur with ‘amai’ in our mental lexicon? The purpose of this study is to obtain some clues to answering this question through experiments of word associations.

This study investigated the results of word association experiments administered to 58 subjects. 31 subjects were given a sheet of paper on which 50 lines of blanked sentences ‘___ wa amai’ <predicative position> were printed, and another 27 subjects were given a sheet of paper on which 50 lines of blanked sentences ‘amai ___’ <attributive position> were printed. They were instructed to fill in those blanks with whichever words came into their mind and as many as possible within 3 minutes.

The results were categorized based on the senses (schema of each sense). It suggests that their word associations are primarily inspired by the basic sense of ‘amai’ which expresses the sense of taste. The frequency of the negative sense which implies ‘a lack of severity’ is the second highest. The synaesthetic expressions showed the low frequency. The possible reasons for the results are discussed in this paper by using the notion of category and prototype.

1. はじめに

我々は日常の言語活動の中で、様々な言語表現を用いてものごとを表現し、伝達している。その中でも比喩表現は、表現を豊かにする上で不可欠のものであるといえる。比喩表現の中でも、触覚、味覚、嗅覚、視覚、聴覚の五感にかかわる共感的な表現は、日常生活の中で頻繁に用いられるもっとも身近な表現のひとつである。それらのほとんどが慣用的な表現として定着しているために、本来は文字通りの表現（原感覚）から転移した比喩的表現であるということすら意識されないほどである。

例えば、「甘い」という形容詞は、本来の意味においては「甘い味」「甘いチョコレート」などのように糖分を感じることでできる対象もしくは味覚そのものを表す名詞と結びついて使用される。また一方では、聴覚や臭覚などで感じることでできる対象を表す名詞と結びつくことによって、「甘い声」「甘いかおり」のような共感的な表現を可能にしている。さらに意味の拡張として「甘い誘惑」「甘い考え」などの比喩表現が存在する。ここに挙げた共感覚や比喩の例はいずれも、日本語話者間においては慣用的な、定着度の高い表現であり、比喩としての意味をほとんど失った死喩であるといえる。死喩のレベルにまで表現が定着している場合、その表現に使用されている語と語の間には強い結びつきの関係が存在すると考えられる。我々は心的語彙において、「甘い」のような多義語の意味に関する情報をどのように整理しているのだろうか。

我々は外界を認知するプロセスにおいて、事象をプロトタイプに基づいてカテゴリー化する能力を備えており（Rosch, 1973）、それぞれのカテゴリーに属する成員は、類似性のリンク^①を介して、プロトタイプとしての典型的なものから周辺的なものまで段階的に存在し、その境界線はフuzzyなものであるとされている（Lacoff, 1987, Taylor, 1989, 山梨, 2000）。同様に、語の多義性のメカニズムにもプロトタイプ効果がみられるとされている。すなわち、多義語の意味の拡張は、比喩的表現も含め、類似性（多義性）のリンクを介して生じ、基本的な意味から複数の異なる方向へ拡張するとされている。しかしながら、多義語の認知プロセスは複雑であり、一種類のプロトタイプのもとにすべての事例を適合させることは不可能であるという見解もあり（Aitchison, 1994）、プロトタイプ効果によって多義性の問題が全て解決されるとは言えない。

辞書においても多義語に関する意味記述の仕方は様々である。飛田（1998）は主要日本語辞書における多義語の意味記述の仕方を4通りに分類し、それぞれについて考察している。また自ら編集した『日本語形容詞活用辞典』の意味記述の仕方について、多義語の意味は「意味の核」と「意味の肉」によって成り立っており、語義間の意味関係についても、「核」が分裂し

① ヴィトゲンシュタインの「家族的類似性」の理論に基づいている。

たものであるとし、転義の関係やそれぞれの意味がプラスイメージを持つのかマイナスイメージを持つのかについても可能な限り記述することを試みている。

『日本語形容詞活用辞典』における意味記述に基づき、「甘い」の語義をまとめると次のようになる。

- (1) 砂糖や蜜のような味がする様子を表す。プラスマイナスのイメージはないが、「あまい」をよい味と受け取ることが多いので、プラスイメージを持ちやすい。
- (2) (1) から進んだ意味で、食物の塩分がたりない様子を表す⁽ⁱⁱ⁾。ややマイナスイメージの意味。本来塩味が期待される食物に対して、その塩加減が十分に達していないというニュアンスがある。
- (3) 音声・におい・雰囲気などが芳醇で快い様子を表す。プラスイメージの意味。きわめて感覚的・主観的な表現であって、客観的な基準はない。
- (4) ものごとに対する態度・姿勢に厳格さがたりない様子を表す。マイナスイメージの意味。
- (5) 程度が低く、不十分である様子を表す。マイナスイメージの意味。満足すべき状態ではないという意味。

この分類において、(1) と (2) は味覚に関わる表現、(3) 以下は味覚から拡張した比喩的表現を示している。

2. 目的

我々の心的語彙のなかに、仮に「甘いもの」というカテゴリーが形成されているとして、そのカテゴリーの中に「味」「チョコレート」「声」「かおり」「誘惑」「考え」などが、どのような状態で配置されているのであろうか。本研究では、形容詞「甘い」が刺激語として与えられた場合、どのような語が想起されやすいのかについての調査を行い、その想起が個人的な要因に左右されるものであるのか、それともある対象者群の共通性を示すものなのか検討を行い、心的語彙における語のネットワークについて有効な知見を得ることを目的とした。

青谷 (1999) の自由連想の実験結果においては、形容詞「甘い」から想起された名詞は、原感覚である味覚に関わるもののみであり、共感覚や他の比喩表現に関わる名詞はみられなかった。この結果から、心的語彙のネットワークにおいて、形容詞「甘い」から想起される名詞の頻度は、プロトタイプ的な意味である原感覚の対象となる名詞がもっとも高いと予想される。また、山梨 (2000) によれば、現代語の用法においては、拡張された意味のかなりの部分が、基本的な意味と同じ程度に慣用化され、定着度に関し際だった差は認められないとされている

⁽ⁱⁱ⁾ ここには塩分に関する記述しかされていないが、とうがらしなどの<辛み>に関してはこちらに分類できるものとする。

が、意味の定着度と想起される名詞の頻度・順位との関連についても検討した。

3. 方法

成人の語連想に関しては、連想の方向に制限を加えない自由連想の方法をとった場合、統合的關係（甘い-蜜）よりも範列的關係（甘い-からい）を想起しやすいという知見が得られている（Aitchison, 1994）。今回の研究の目的は、形容詞「甘い」から想起される名詞を分析することであるので、連想を統合的關係のみに制限する必要がある。従って、自由連想の方法はとらず、「_____は（が）甘い」（叙述用法）、「甘い_____」（限定用法）という二種類の穴埋め文を用意し、制限連想による調査を行った。

専門学校生31名（女性29名、男性2名）に対し、「_____は（が）甘い」という穴埋め文を50行印刷した用紙を、また27名（女性25名、男性2名）に対し、「甘い_____」という穴埋め文を50行印刷した用紙を配布し、3分間のうちに想起された語を下線部に記入し、できるだけ多くの文を完成させるように教示した。

4. 結果

4.1 語彙数および種類

刺激語「甘い」に対して想起された語は、次のような基準により分類された。

分類基準	味覚	① 糖分（基本義）<+・-> ⁽ⁱⁱⁱ⁾
		② からさの不足<->
非味覚	① 共感覚 ^(iv) <+>	
	② 心理的快感 ^(v) <+>	
	③ 厳格さの不足<->	
	④ 状態の不十分さ<->	

想起された語を、この基準に従って分類した結果、語彙数と種類は表1の通りであった。叙述用法、限定用法ともに<糖分>をあらわす基本義の出現が語彙数・種類ともにもっとも多く、次いで<厳格さの不足>が多くみられた。<心理的快感>に関しては、叙述用法による表現は不可能であるため（*その誘惑は甘かった。）、限定用法のみの出現となった。限定用法におい

⁽ⁱⁱⁱ⁾ <>内は語義に内包されるイメージを表す。太字はより強いイメージを指す。

^(iv) 共感覚メタファーの方向性の法則により、さらに嗅覚、視覚、聴覚への転移に細分化される（山梨1988）。Dirven (1984) や Jantra (1999) では触覚についても転移があるとしているが、本研究ではそれを支持しない立場をとる。

^(v) 『現代形容詞用法辞典』においては、<心理的快感>は<共感覚>と同じ項に分類されているが、本研究では、<心理的快感>を<共感覚>から拡張した独立的意味と考えることとする。

ては三番目に多く出現している。〈からさの不足〉〈状態の不十分さ〉の表現はいずれの場合もその数が少なかった。

出現数の少ない〈からさの不足〉〈状態の不十分さ〉を除いた〈糖分〉〈厳格さの不足〉〈心理的快感〉〈共感覚〉の4種類における、それぞれの平均語彙数は表2の通りであった。総語数においては、限定用法が叙述用法より被験者によるばらつきが大きく ($F=2.56$, $df=26,30$, $P<.01$)、平均語彙数についても有意差がみとめられた ($t=2.74$, $df=42$, $P<.01$)。分類別では、〈共感覚〉〈糖分〉〈厳格さの不足〉に関して、それぞれ限定用法と叙述用法との

表1：出現語彙数および種類

	叙述用法 (n=31)		限定用法 (n=27)	
	種類	語彙数	種類	語彙数
糖分 (基本義)	85	269	96	247
からさの不足	1	2 ^(vi)	1	1
共感覚	5	6	9	14
心理的快感	—	—	33	74
厳格さの不足	47	99	42	102
状態の不十分さ	1	1	0	0
慣用的でない比喻	2	2	14	14
文	1	1	8	8
慣用句 (甘い汁)	—	—	1	1
反意語 (すっぱい)	—	—	1	1

間に有意な差はみとめられなかった。

表2：対象者の平均語数 (SD)

	総語数	糖分(基本義)	厳格さの不足	共感覚	心理的快感
叙述用法(n=31)	12.3 (4.97)	8.7 (4.98)	3.2 (2.60)	0.2 (0.60)	—
限定用法(n=27)	17.1 (7.94)	9.2 (6.38)	3.8 (3.27)	0.5 (0.79)	2.7 (2.28)

4.2 出現順位

4.2.1 第1位出現語彙

一般に、自由連想の実験においては、ある刺激語に対し最初に想起された語が、心的語彙のネットワークを解明する上でもっとも重要な意味を持つ語であるとされている (Meara, 1980、Sökmen, 1993)。本研究では統合的關係のみを

表3：第1位に想起された語(対象者数)

叙述用法		限定用法	
チョコレート	(7)	お菓子	(5)
砂糖	(7)	ケーキ	(5)
ケーキ	(6)	あめ	(2)
母	(2)	誘惑	(2)

(vi) 同一被験者による「このカレーは甘い」と「甘口カレーは甘い」の2例。

想起させる制限連想の方法をとったが、最初に想起された語が「甘い」の統合的關係における、もっとも強い連想關係を持つ語であると考えられる。限定用法、叙述用法それぞれにおいて最初に想起された語のうち上位4語を挙げると(表3)、「ケーキ」のみが共通して出現していた。また、意味別の傾向としては(表4)、<糖分>に関する出現がいずれの用法においてももっとも多く、次いで、叙述用法では<厳格さの不足>、限定用法では<心理的快感>が多く出現した。

表4：第1位に想起された語－意味別－(%)

	叙述用法	限定用法
糖分(基本義)	80.6	70.4
からさの不足	0	0
共感覚	0	7.4
心理的快感	—	18.5
厳格さの不足	16.1	3.7
状態の不十分さ	0	0
その他の比喩	3.2	0

4.2.2 出現頻度上位の語

叙述用法、限定用法における出現頻度上位語を挙げると(表5)、叙述用法においては、上位6位までがすべて<基本義>によって占められている。一方、限定用法においては上位に<厳格さの不足>が出現している。また限定用法においては<心理的快感>の出現もみられた。

意味別出現頻度においては(表6)、<厳格さの不足>における「考え」が叙述用法、限定用法で共通して第1位として出現した。<厳格さの不足>では「親」「祖父母」など「人」に関する出現が多かった。

表5：出現頻度上位の語－全体－(%)

叙述用法		限定用法	
砂糖 (77.4)	<糖分(基本義)>	ケーキ (66.7)	<糖分(基本義)>
チョコレート (71.0)	<糖分(基本義)>	お菓子 (63.0)	<糖分(基本義)>
アイスクリーム(64.5)	<糖分(基本義)>	ジュース(51.9)	<糖分(基本義)>
ケーキ (51.6)	<糖分(基本義)>	考え (48.1)	<厳格さの不足>
あめ (45.2)	<糖分(基本義)>	ひと (44.4)	<厳格さの不足>
ジュース (35.5)	<糖分(基本義)>	あめ (44.4)	<糖分(基本義)>
考え (32.3)	<厳格さの不足>	砂糖 (44.4)	<糖分(基本義)>
はちみつ (32.3)	<糖分(基本義)>	ことば (37.0)	<心理的快感>
いちご (29.0)	<糖分(基本義)>	親 (33.3)	<厳格さの不足>
父 (22.6)	<厳格さの不足>	いちご (33.3)	<糖分(基本義)>
母 (22.6)	<厳格さの不足>	畏 (33.3)	<心理的快感>
お菓子 (22.6)	<糖分(基本義)>	蜜 (29.6)	<糖分(基本義)>
あんこ (22.6)	<糖分(基本義)>		

(vii) %はその語を想起した対象者の割合を示す。出現順位をつけるのに当たっては、実験時間内に想起された語をトータルとして捉え、想起の順位に関しては問わないこととした。

表 6 : 出現頻度上位の語一分類別 - (%)

叙述用法

糖分 (基本義)	からさの不足	共感覚	心理的快感	厳格さの不足	状態の不十分さ
砂糖 (77.4)	(この)カレー(3.2)	顔 (6.5) ^(viii)	—	考え (32.3)	運転 (3.2)
チョコレート (71.0)	甘口カレー(3.2)	かおり(3.2)	—	父 (22.6)	
アイスクリーム(64.5)		におい(3.2)	—	母 (22.6)	
ケーキ (51.6)		外見 (3.2)	—	親 (19.4)	
あめ (45.2)		ピンク(3.2)	—	考え方(12.9)	
ジュース (35.5)			—	詰め (12.9)	
はちみつ (32.3)			—	自分 (12.9)	
いちご (29.0)			—	先生 (12.9)	
お菓子 (22.6)			—	祖父 (12.9)	
あんこ (22.6)			—	祖母 (12.9)	

限定用法

糖分(基本義)	からさの不足	共感覚	心理的快感	厳格さの不足	状態の不十分さ
ケーキ (66.7)	キムチ (3.7)	かおり (11.1)	ことば (37.0)	考え (48.1)	
お菓子 (63.0)		マスク (7.4)	畏 (33.3)	ひと (44.4)	
ジュース(51.9)		声 (7.4)	誘惑 (25.9)	親 (33.3)	
あめ (44.4)		色 (7.4)	恋 (14.8)	人生 (22.2)	
砂糖 (44.4)		笑顔 (3.7)	話 (14.8)	先生 (11.1)	
いちご (33.3)		目 (3.7)		祖母 (11.1)	
蜜 (29.6)		目線 (3.7)		彼氏 (11.1)	
みかん (25.9)		におい (3.7)		父 (11.1)	
りんご (25.9)		ささやき(3.7)			
もの (25.9)					

5. 考察

「甘い」が刺激語として与えられた場合、対象者群に関して、語の想起のされ方に一定の傾向がみられることがわかった。〈基本義〉に関する出現が連想されやすいという結果は青谷(1999)でもみられたが、〈厳格さの不足〉、〈心理的快感〉(限定用法のみ)についても相当数の想起がなされる傾向のあることがわかった。この結果から、多義の構造を持つ「甘い」の中で、〈厳格さの不足〉、〈心理的快感〉は〈基本義〉に続いて、定着度の高い意味であると考えることができる。一方、比喩表現の中でも〈共感覚〉、〈状態の不十分さ〉に関する想

(viii) 「顔」は叙述用法では〈共感覚〉(視覚への転移)として扱い、限定用法では〈厳格さの不足〉として分類する。

起が少ない傾向がみられたが、今回の結果のみで、これらの意味が想起されにくい、すなわち定着度の低い意味であるとするは適切でないと考えられる。今回提示した刺激語が、〈共感覚〉、〈状態の不十分さ〉の意味を活発に想起させることができなかつたとすれば、どのような刺激語を提示すれば高い想起率が得られるかについては、なお検討する必要がある。

〈基本義〉で出現頻度の高かった語の多くは、日常経験的に〈お菓子〉〈果物〉などのカテゴリーの成員として認知されているものであった。特に限定用法においては「お菓子」というカテゴリー名そのものの出現も上位にランクされている。カテゴリーの成員あるいはカテゴリー名そのものが想起されることによって、そのカテゴリーに属する他の成員も活性化され、想起されやすくなるのではないかと考えられる。一方、「ケーキ」は叙述用法においても、限定用法においても共に出現頻度上位の語であったが、その下位カテゴリーに分類される「チーズケーキ」「ショートケーキ」などは一例も想起されなかつた。このような結果から、活性化され、想起されやすくなるのは、カテゴリーの基本レベル^(ix)であると考えられ、基本レベルにある語がもっとも記憶・再生されやすいという仮説(Lacoff, 1987)と一致するものである。「甘い」は属性形容詞であり、そのカテゴリーに属する成員のうちいくつかは共通して持っている属性を表している。カテゴリーの属性に関する知識は基本レベルにおいてもっとも多く保持されていると(Lacoff, 1987)すれば、そのため基本レベルの語が多く想起されたと考えられる。

「お菓子」というカテゴリー名が出現頻度の上位にあったのに対し、「果物」は限定用法で1例、叙述用法で5例みられたただけであった。この違いは〈お菓子〉、〈果物〉それぞれのカテゴリーにおける「甘い」という属性の地位の相違によるものと考えられる。「甘い」という属性は、〈お菓子〉カテゴリーにおいてはこのカテゴリーにおけるプロトタイプの成員に共通の中心的属性であると考えられる。一方、〈果物〉カテゴリーにおいては「甘い」のほかに「すっぱい」、「甘酸っぱい」など等位の属性が複数存在し、〈お菓子〉カテゴリーの場合ほど、中心的な地位を担っていないと考えられる。そのため、属性形容詞に関する想起には、そのカテゴリー内におけるその属性の地位が反映されると考えられる。

〈厳格さの不足〉に関する想起結果についても、カテゴリーという概念が反映されていると考えられる。例えば、「父」が想起されることによって、〈人〉カテゴリーの他の成員である「母」「親」などが続いて想起されやすくなるという現象がみられたからである。しかしながら、〈人〉カテゴリーにおける状況は先にあげた〈お菓子〉カテゴリーの場合とは異なっていると考えられる。〈お菓子〉カテゴリーにおいて「甘い」はプロトタイプの属性であり、固定化されている。一方、〈人〉カテゴリーにおいては、「甘い」は固定化された属性であるとは言えない。本研究において今回出現頻度の高かった「父」「母」「親」などは必ずしも〈人〉カテ

(ix)「基本レベル」に関しては Lacoff (1987) 参照。

ゴリーにおけるプロトタイプの成員であるとは言えず、むしろ<甘い人>というサブカテゴリーにおけるプロトタイプの成員であると考えられる。この場合、「甘い」は<甘い人>というカテゴリーの属性であるというよりは、新たなカテゴリーのラベルとして作用していると考えられる。

<甘い人>というようなサブカテゴリーは、我々が心的語彙ネットワークの中に持っている自然カテゴリーとは異なり、与えられた目標（刺激）によって一時的に形成されたものであると考えられる（Lacoff, 1987）。刺激語によって、心的語彙の中に存在するカテゴリーが活性化するだけでなく、一時的なカテゴリーが形成される場合があると考えられる。

一方、<人>カテゴリーに属する語以外で<厳格さの不足>において出現頻度の高かった「考え」は、抽象的事象として他に「詰め」「発想」「判断」などの語と意味的に関連しているが、これらの関連語については、「詰め」が叙述用法で4例、限定用法で1例、「発想」が叙述用法で1例のみ、「判断」においては1例もみられなかった。「考え」それ自体は「甘い考え」、「考えが甘い」というように「甘い」との慣用的な強い結びつきを持ってはいるが、そこから「詰め」「発想」「判断」などの関連語を想起させるような、すなわち一時的カテゴリーを形成させるような機能は果たさなかったと考えられる。この現象が、現代の若者における表現力の貧しさの一因となっていると言えるかも知れない。一時的なカテゴリー形成と、意味の定着度との間にどのような関係があるのか、今後なお検討する必要があると考えられる。

6. 結語

「甘い」における<厳格さの不足>や<状態の不十分さ>のマイナス・イメージをもつ意味は日本語特有のものであり、英語においてはこのような意味の拡張例はみられない（Dirven, 1985）^(x)。<厳格さの不足>や<状態の不十分さ>は<からさの不足>の持つマイナス・イメージから、類似性のリンクを介して拡張した意味である仮定し（Backhouse, 1994）、意味の拡張関係をネットワーク状に表したものが、図1^(xi)である。

外国語学習において語彙習得は母語による干渉をもっとも受けやすく、学習を妨げる要因のひとつになっている。英語学習者は語彙習得に際し、日本語の対訳によって意味を記憶しようとする。例えば、'sweet' = 「甘い」と記憶した場合、日本語における「甘い」の意味をそのまま英語にあてはめる過ちを犯すのである。母語干渉についてはこれまで悪影響のみが指摘されてきた。しかし母語である日本語の語彙について持っている知識はどの程度あるのだろうか。例えば、「甘い」がプラス・マイナス両方のイメージを表す形容詞であることを、普段意識して使っているのであろうか。「甘い誘惑」と「甘い考え」が異なった意味分類に属することを

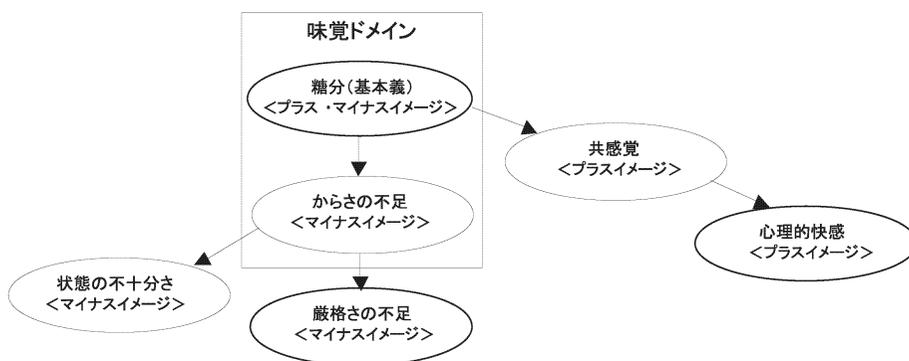
^(x) Jantra (1999) は、タイ語/wāan/(あまい)に関してもマイナス・イメージをもつ意味はないとしている。

^(xi) 太線で囲われた意味は今回の研究で出現頻度の高かったものを示す。

適切に説明できる人はどれくらいいるのだろうか。

我々は日本語を使うことはできるが、日本語について知っているとは言えない。もし日本語の語彙に関して知識を持てば、すなわち語の意味体系を認識できれば、英語 ‘sweet’ の意味範囲と日本語「甘い」の持つそれとの比較が可能である。比較によって ‘sweet’ にはマイナスイメージを表す意味がないことが理解できれば、‘sweet parents’ を「甘い親」と誤って解釈することもなくなると言えよう。多義語の意味範囲の習得に、母語の意味を効果的に利用できるかどうかについて、今後研究を進めていく予定である。

図1：「甘い」の意味拡張ネットワーク



引用文献

- Aitchison, J. 1994 *Words in the mind: an introduction to the mental lexicon*, 2nd edn. Blackwell.
- Backhouse, A.E. 1994 *The lexical field of taste: A Semantic study of Japanese taste terms*. Cambridge Univ. Press.
- Dirven, R. 1985 Metaphor as a basic means for extending the lexicon. W. Paprotte and R. Dirven, eds., *The Ubiquity of Metaphor*. John Benjamins Publishing Company. pp.85-119.
- Jantra, J. 1999 日本語形容詞『あまい』の意味拡張と広告における多義的使用の分析. *Dynamis* (京都大学)、Vol.3.、pp.142-192.
- Lacoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.
- Meara, P. 1980 Vocabulary acquisition: a neglected aspect of language learning. *Language Teaching and Linguistics: Abstracts*, 13, pp.221-46.
- Rosch, E. 1975 Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General*, Vol. 104, No. 3. pp.192-233.
- Sökmen, A. J. 1993 Word association results: a window to the lexicons of ESL students. *JALT Journal*, Vol. 15, No. 2. pp.135-150.
- Taylor, J. R. 1989 *Linguistic categorization: prototypes in linguistic theory*. Oxford Univ. Press.
- 青谷法子. 1999 英語学習者の語彙ネットワークに関する一考察. 東海学園大学研究紀要、第4号. pp.217-

226.

飛田良文. 1998 国語辞書における形容詞の意味記述. 言語、Vol.27、No.3、pp.64-70.

飛田良文、浅田秀子編. 1991 『現代形容詞用法辞典』. 東京堂出版.

山梨正明. 1988 『認知科学選書 17: 比喻と理解』. 東京大学出版局.

山梨正明. 2000 『認知言語学原理』. くろしお出版.

参考文献

McCarthy, M. 1990 *Vocabulary*. Oxford University Press.

Meara, P. 1984 The study of lexis in Interlanguage. Davis, A. et al., eds., *Interlanguage*.
Edinburgh University Press. pp.225-35.

Meara, P. 1993 The bilingual lexicon and the teaching of vocabulary. Schreuder, R. et al., eds.,
The bilingual lexicon. John Benjamins Publishing Company. pp.279-297.

Nation, P. 1993 Vocabulary size, growth, and use. Schreuder, R. et al., eds., *The bilingual lexicon*.
John Benjamins Publishing Company. pp.115-134.

Williams, J.M. 1976 Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change. *Language*, Vol. 52,
No.2. pp.461-478.

仁田義雄. 1998 日本語文法における形容詞. 言語、Vol.27、No.3、pp.26-35.